

「その3人に、私は入りたい。」

～思うだけで終わらせない、北原智美さんの行動力～



玄関の引戸をガラッと開けると、入り口には「みんなの基地」の決まりごとを書いた手書きの紙。そばには、こども服が並ぶリユースコーナーがありました。

奥からにこにこ笑顔で迎えてくれたのは、箕輪町こどもの居場所拠点「みんなの基地」「Pur みんなの学校」代表の北原智美さん。

飾らない自然な笑顔と、誰でも受け入れてくれるような温かな雰囲気印象的です。

こどもたちの学びや居場所づくりに取り組む北原さんは、どのような経験を重ね、今の活動にたどり着いたのでしょうか。

「みんなの基地」のこと、これまで歩んできた道のり、そしてこれからについて、お話を伺いました。

ずっと箕輪で。ここが私の暮らす場所

地元の小中学校、高校を卒業後、家から通える短期大学の心理学科へ進学しました。そこで心理学を学び、カウンセラーの資格を取得しました。

卒業後は伊那市の一般企業に就職しました。当時は、今のようなこどもの支援に関わる仕事を考えていたわけではなく、「自分が何をやりたいのか、まだよく分かっていなかった。」といいます。

23歳で結婚し、その後すぐに出産。仕事を辞め、専業主婦として子育てに専念することになりました。今は3人のこどもに恵まれ、子育て中心の生活を送ります。

心理学を学び、資格を取ったことが、すぐに仕事につながったわけではありません。

今につながる道は、子育てをしながら少しずつ始まっていきました。

「私に何ができるだろう」と考え始めた子育て期



こどもたちがまだ小さかった頃、北原さんは自分自身について考えるようになりました。

「私に何ができるんだろう。」

まずは子育てをしながら、さまざまなアルバイトを経験しました。

「やりたいと思ったことは、全部やってみたんです。営業の仕事にも挑戦しました。」

最初から将来の仕事を決めて、そのために経験を積んでいたわけではありません。興味を持ったこと、やってみたいと思ったことに、その都度挑戦していたのだそうです。

そんな頃、周囲のママ友たちが自分の好きなことや得意なことを見つけ、それを仕事にして社会へ出ていく姿を目にするようになりました。

それを見ながら、「私には何も強みがない。」と焦りを感じていたといいます。

「自分には何ができるのか。」

「自分が本当にやりたいことは何なのか。」

その答えを探すように、いろいろな仕事を経験していきました。

「思うだけ」で終わらせたくない



北原さんが大切にしている考えがあります。

「何かをやろうと思う人が100人いたとしても、本当に行動して、最後までやり遂げる人は3人くらいしかいないといいます。私は、その3人に入りたいのです。」

「やってみたい」と思うだけで終わらせず、まずは一歩踏み出してみる。そして、始めたことは途中であきらめず、自分なりの形にしていく。北原さんのこれまでの歩みを振り返ると、その言葉どおりに行動してきたことが分かります。

できない理由を探して立ち止まるのではなく、「どうしたらできるだろう」と考えながら前へ進む。それが北原さんらしさなのかもしれません。

北原さんにとって「やりたいことをやる」とは、単に自分の好きなことを自由にするという意味ではありません。小さくても、まず一歩を踏み出す。その積み重ねが人との出会いや新たな活動につながっています。

塾のアルバイトから「自分でやってみる」へ



転機の一つとなったのが、学習塾でのアルバイトでした。

こどもたちに勉強を教える仕事を経験する中で、「自分でも塾をやってみたい」という思いが少しずつ芽生えていきました。

その思いを後押ししたのは、自分のこどもたちの存在でした。「自分のこどもたちのためにも、安心

して学べる場所をつくりたい」。そう考えた北原さんは、迷うことなく学習塾を開くことを決めました。場所は、実家の敷地内に空いていた建物を使わせてもらいました。

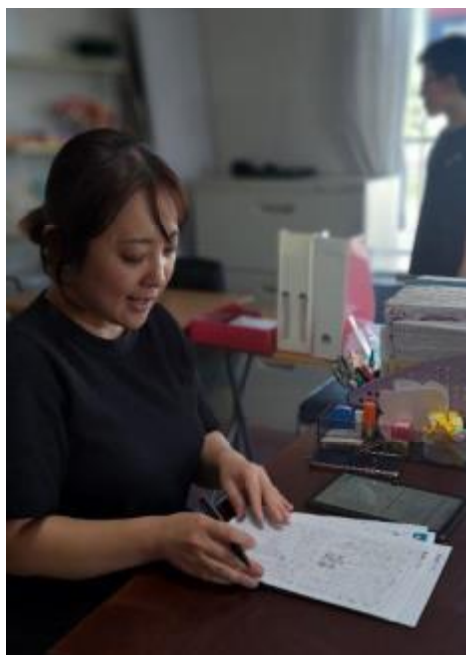


当時、「自分には何もない」と感じていた北原さんにとって、自分の手で仕事を始めることは大きな挑戦でした。それでも、一歩踏み出して始めた学習塾は、単に勉強を教える場所にとどまらず、北原さん自身の世界を大きく広げていくことになります。

もともとは、自分のこどもたちのために始めた学習塾。その時は、まさかこの小さな一歩が、その後のさまざまな活動や多くの人とのつながりの始まりになるとは思っていませんでした。

塾を開いて間もなく、不登校のこどもの学習支援を依頼されました。目の前の一人のこどもと向き合ったことをきっかけに、学校に行きづらさを抱えるこどもや、その家族との出会いが少しずつ増えていきました。

学習塾の開校は、振り返れば、北原さんが地域のこどもたちや家庭と関わり、現在の活動へと歩みを広げていく原点であり、大きな転機となったのです。



プリントの採点中



教室の様子

不登校の子どもとの出会い

不登校のこどもに勉強を教える中で、「学校へ行けないこと」と「勉強したくないこと」は同じではないと気づきました。

学校には行けなくても、勉強したいと思っている子がいるのです。



学びたい気持ちがあっても、そのための場所や機会がない子がいるのです。

ご縁があり、小学生の居場所づくりを行う施設の立ち上げにスタッフとして関わるようになりました。

その施設でこどもたちと接する中で、心に深く刻まれた言葉がありました。

「あの時、勉強していたらよかった。」

学校へ行けなかった時期を振り返ったこどもの言葉でした。

この言葉を聞き、改めて考えました。

不登校であっても、学びたいこどもがいる。そうしたこどもが、学校以外でも勉強できる場所が必要なのではないか。

さらに必要なのは、勉強だけではないと感じるようになりました。

料理をする。畑に出る。人と関わる。さまざまな体験をする。

将来、自分の力で生活していくためには、学習とともに生活する力を身につけることも必要です。

「勉強できる時間があって、生活力も身につけられて、その子が自立していくための支援ができれば。」

その思いが、現在の「みんなの基地」へとつながっていきました。



「みんなの基地」を立ち上げる

こどもたちと関わるようになり、不登校のこどもが想像していた以上に多いことを目の当たりにしました。

- ・学校へ行けない。
- ・人と関わりたくない。
- ・自分に自信が持てない。

中には、「消えてしまいたい」と感じるほど低い自己肯定感を持つ子もいました。

そうした現実を知り、強い危機感を感じました。



必要なのは、学校へ戻ることを目的にした場所ではなく、その子が安心して過ごせる場所、必要なときに学び、人と関わり、さまざまな経験ができる場所でした。

そこで立ち上げたのが、「みんなの基地」です。

こどもたちが安心して過ごしながら、学習する時間を持ち、生活する力も身につけていきます。

午後には講師を招き、畑や調理、プログラミングなど、学校とは違ったさまざまな体験も取り入れています。

一人ひとりが将来、自分なりの形で自立していくことを考えた支援です。

一人ひとり違うから、まずは受け止める

目の前にいるこどもたちが抱えている事情は、一人ひとり違います。

学校へ行けなくなった理由も、家庭の状況も、人との関わり方もさまざまです。そのため、決まった答えやマニュアルどおりの支援が、すべてのこどもに当てはまるわけではありません。

現在、みんなの基地スタッフは7名のアルバイトでやっていますが、皆で大切にしているのは、まず、その子を知ろうとすることです。



もっちゃん文庫

「まずは受け止める事から。傾聴ですね。」

できないことを否定したり、「こうした方がいい」と決めつけたりするのではなく、まず話を聴く。その子が今、どんな気持ちでいるのかを受け止めるところから始めます。

そうした関わりを積み重ねることが、「ここにいていい」「ここなら安心できる」と思える居場所につながっていくのです。

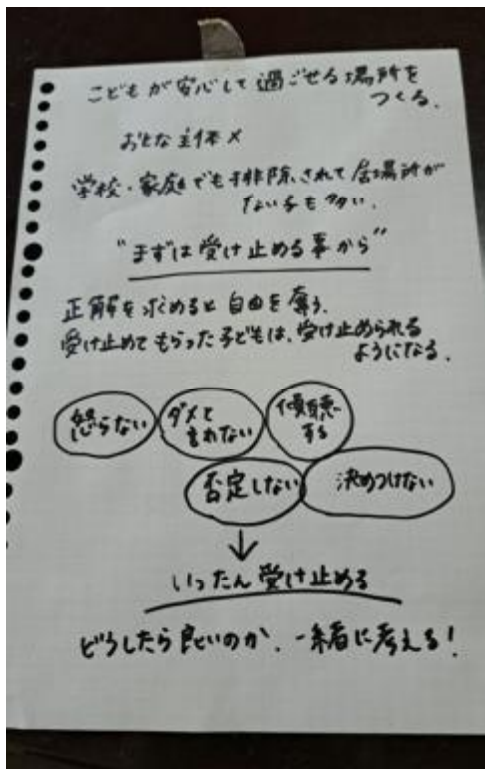
学生時代に学んだ心理学やカウンセラーとしての知識も、現在の活動に生かされています。それだけではありません。

3人のこどもを育ててきたこと。さまざまな仕事を経験したこと。地域の中で多くのこどもや保護者と出会ってきたこと。そして、うまくいかないことも経験しながらその都度考えてきたこと。

それらすべてが、現在の支援活動につながっています。



こどもたちの作品①



基地スタッフと共有している言葉

一つの活動を始めると、そこで新しい人と出会い、今まで見ていなかった課題が見えてきます。「こんな場所が必要だ」と感じれば、自分にできることを考え、動いてみるのです。

以下は、「みんなの基地」を利用していた子が書いてくれた文です。(電子記録より)

- ・いろいろな人と関わってどんどん大人に近づきたい。



こどもたちの作品②

- ・スタッフの一員として「あれやって」って言われたらちゃんとやる。

- ・イベントで沢山の人と喋っていやなことがあっても笑顔でいたい。

この言葉を見て、みんなの基地で過ごした子たちがどんどん変化していく様子に、この取組の重要性を改めて強く感じました。こどもが変わるきっかけは、大人が考えているところとは違う場所にあるのかもしれません。

だからこそ、最初から答えを決めず、その子が動き出すまで関わり続ける。

「まずは受け止めることから。」



玄関に置かれたリユースコーナー

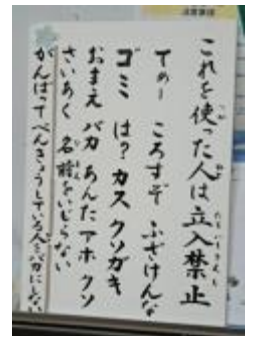
北原さんが大切にしてきたこの言葉は、こうした一人ひとりのこどもとの関わりの中で、実践され続けています。

必要な場所がなければ、自分たちでつくる。そして、そこで子どもたちが自分なりの一歩を踏み出すのを支える。

活動が広がってきた背景には、いつも目の前にいる子どもたちの姿と声がありました。

まとめ

「私には何も"強み"がない。」



子どもたちが自主的に作った、決まり



をはじめとする活動につながっています。

そして、どの活動にも共通しているのが、「まずは受け止める」という姿勢です。

「誰一人取りこぼさない社会をつくりたい。」

こどもにも、保護者にも、まず目の前の人と向き合う。北原さんはこれからも、この思いを大切に箕輪町で活動が続けていきます。

これからやってみたいことは？との問いには「(今までも) やりたいことしかやってないから。笑 これからも楽しく生きていきます。」と、笑顔で返してくれました。

振り返ってみれば、「やりたい」と思ったことを、思うだけで終わらせず一歩踏み出せることこそが、北原さんの最大の強みだったのかもしれません。

「やりたい」をやってみる。

その一歩が、自分でもまだ気づいていない「自分らしい生き方」を見つけるきっかけになることを、北原さんの歩みは教えてくれました。

『自分には強みがない』と感じていた北原さん。

けれど、柔らかな笑みの奥にあるまっすぐな思いは、今、強みという言葉を超え、確かな『信頼』と『絆』となっています。



取材：平賀裕子、千田るみ子
構成・執筆：千田るみ子
ご協力：北原智美さん

北原さんの一日のスケジュール

こどもたちや家庭の支援をしながら、家族との時間も大切に。
「やりたいこと」を形にする毎日。

月・水・金のスケジュール



火・木・土のスケジュール



北原さんが大切にしている、毎日欠かさない2つの目課

01 朝に夕飯づくりをして時短。 これ、大事!!



朝のうちに夕飯を準備しておくことで、夜はこどもたちや家族との時間をしっかり確保。気持ちにも余裕が生まれます。

02 寝るの大事!! 21時就寝。



しっかり眠ることで、心も体もリセット。翌日を元気に過ごすために、「早く寝る」を大切にしています。

Message

自分の心と体を整えることが、
誰かの笑顔につながる。

忙しい毎日でも、小さな工夫をしながら家族との時間も、自分の時間も、どちらも大切に。「やりたいこと」を続けていけるのは、日々の暮らしを整えることから。